

学 位 論 文 審 査 要 旨      公開審査日 2018 年 11 月 28 日(水)

報告番号：甲・乙 第 1771 号	氏名： 荒神 裕之	
論文審査 担当者	主査 教授      三木 保 印	副査 教授      羽生 春夫 印
		副査 教授      山本 謙吾 印
<p><b>審査論文の題目：</b>患者相談体制の整備と運営の質の差異に関する横断研究          —患者サポート体制充実加算開始を起点とした患者相談窓口の開設時期による比較—</p> <p><b>著 者：</b>荒神 裕之，小田切 優子，橋本 廸生，實川 博己，高宮 朋子，福島 教照，菊池 宏幸，井上 茂</p> <p><b>掲載誌：</b>医療コンフリクト・マネジメント（2019 年掲載予定）</p>		
<p><b>論文要旨：</b> 2012 年 4 月に開始された患者サポート体制充実加算の施設基準は概括的で、患者相談窓口（窓口）の運営の実務や評価基準に明確な規定がなく、窓口の質の現状は未だ明らかでない。本加算開始前からの既設の窓口（既設窓口）と開始後に新設された窓口（新設窓口）では、窓口設置の背景や実績が異なるため質の差異があり得る。新設窓口では、稼働期間が短いことから質の点で懸念もある。そこで本研究では、本加算の届出窓口の全国調査により、「既設窓口」と「新設窓口」の間の整備と運営の質の差異を明らかにすることを目的とした。対象は、2014 年 7 月時点で本加算の届出があった全国 3434 施設に調査票を送付して窓口担当者から匿名の回答を得た。調査票は、Donabedian の提唱する質評価の 3 側面である構造（Structure）、過程（Process）、アウトカム（Outcome）に基づき構成した。構造では医療機関と窓口の構成、過程では窓口の運営、アウトカムでは患者相談体制の充実による効果を調査した。有効回答は 1397 施設（40.7%）より得られた。開設時期と病床規模のオッズ比は、1.6，95%CI [1.3, 2.0] であり、新設窓口は、病床規模が小さな医療機関が多かった。アウトカムである「患者相談体制の充実による効果」は、総合得点と下位因子の「相談対応における効果」「連携協力における効果」で既設窓口の質が高かった。一方、最終的なアウトカムである「患者側における効果」では、既設窓口と新設窓口の間で有意な差を認めなかった。</p> <p><b>審査過程：</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 評価の難解なテーマに関して独自の研究プロセスで、しっかりとデザインされたユニークな研究であることを、分かり易く説明できていた。</li> <li>2. 1397 件の多数のアンケート収集・集積を行い、適正なデータ解析がなされていた。</li> <li>3. 合理性を持った考察から結果を導き、患者サポート体制充実加算が医療機関における患者相談体制の整備促進に資する事、又医療者のケアにも繋がる事を論述できていた。</li> <li>4. 今後の課題について、本件研究の限界も含め、適正な質疑応答がなされ、妥当な解答が得られた。本研究の今後の展望についても言及できていた。</li> </ol> <p><b>価値判定：</b> 患者サポート体制充実加算開始後、病床規模の小さな医療機関で患者相談体制の整備が促進され、新設患者相談窓口も期待された役割を果たしている事を示し、更にこの体制のより一層の質向上には、本加算の継続も重要な施策であることを明らかにした。今後の患者相談窓口の充実に資する研究と判断で出来、学位論文としての価値を認める。</p>		